

作者の言葉〔『火 第一部』〕

坂口安吾

青空文庫

日本に戦争があつてくれれば——私は二十年前から、そう考えていた。小説家としての私は、私の存命中に戦争に遭遇したいということを、半ば漠然と、しかし、半ば明確に、希望していたことは否定できない。

スタンダールなどを読むたびに、私だったら、戦争をこんな風には書きはしないだろうと考え、なんとかして存命中に戦争にお目にかかりたいと思つたのだ。

人間は平和を愛す動物でもあるが、葛藤のさけがたい動物でもある。人間の本性は葛藤の場にあらわれ、平和はそのあとの結論として出てくるにすぎないものだ。

個人同志の争いよりも、戦争は、人間の本性をもつと露骨にさらけだす。外交の謀略にくらべれば、個人同志の謀略などは問題にならない。個人は法律や義理人情や、いろいろのキヅナによって本性の露出に束縛を加えられているが、国家のうける束縛は軽微で、勝者は万能でもあり、国家の名に於てなされる陰謀は、個人の陰謀よりも人間色が濃厚なのである。

私は人間を書きたいのだ。私のあとう限りの能力によつて。そのために、戦争が見たかった。他人の録した戦争ではなく、私自身のみで戦争を見て、私自身の知りうる人間の限界まで究めたかった。

私は、過去に戦争に遭遇した多くの文人たちを、羨みもし、私

自身がそうでないことによつて、敵意をいだいてもいたのである。私の念願は達せられた。私は戦禍の中を逃げまどいもし、私の目で見うる限りの戦争を見つめつづけることができた。

この結論として書きだしたのが、この小説であり、いわば二十年来の念願であり、狙いでもあった。

この小説はたぶん五章にわかれ、作中の時代は、終戦後までつづく筈である。

半年か一年に一章ずつ、まあ三年ぐらいのうちに、書き終るつもりである。作中の人物は一切架空であり、戦時内閣の総理大臣は、東条でも近衛でもない。戦争に至る道程、謀略も内乱も一切架空で、私自身が到達しうる人間の限界を示しているにすぎない

だ
ろ
う。
。

一
九
五
〇
年
四
月
八
日
伊
東
に
て、

作
者

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 07」筑摩書房

1998（平成10）年8月20日初版第1刷発行

初出：「火 第一部」大日本雄弁会講談社

1950（昭和25）年5月30日

※底本のテキストは、著者の直筆原稿によります。

入力：tatsuki

校正：砂場清隆

2008年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

作者の言葉〔『火 第一部』〕

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>